

ある過疎村落の現状についての一考察 —新潟県佐渡市の集落を事例として—

土取 俊輝（神戸大学大学院国際文化学研究科）

現在、日本の村落社会は、過疎化、高齢化、少子化等によって、存続の危機に立たされているとされる。先行研究では、そのような状況にある村落社会をどう再生していくかについて、研究・議論が重ねられてきた。近年では、村落社会の再生だけでなく、撤退についても、地元住民がやむを得ず選択することになった場合には、選択肢に入れながら議論していくべきではないかという方向性となっている〔吉野 2009: 29-31〕。しかしそれだけでなく、村落社会の再生に関する課題として、実際の生活現場において、過疎化、高齢化、少子化等により、村落社会が本当に解体・崩壊しているのかどうかを、より分析的な視点から検証していくことがあげられている〔吉野 2009: 34-35〕。つまり、集落の再生・撤退について議論するよりもまず、個々の村落社会で実際に起こっている社会変動について、安易に解体・崩壊と結びつけずに、分析していくことが求められているといえる。本発表は、新潟県佐渡市の集落を事例として取りあげ、日本の過疎村落の現状について、過去の状況との比較を通して考察するものである。

調査地である新潟県佐渡市 S 集落（仮名）は、佐渡島北部の外海府地方に位置する集落である。佐渡島は新潟県本土の西部に位置しており、日本では沖縄本島に次いで 2 番目に大きな離島である。佐渡島北部にある S 集落は、海と 2 つの山に挟まれた場所に位置している。生業は伝統的には半農半漁であり、少ない土地や資源を活用して生きるために様々なことを生業として行っていた。例えば、米や野菜の栽培、イソネギ、刺網漁、炭焼き（後に出稼ぎに取って代わられる）などである。現在は民宿や料理の仕出し、市役所勤務などで生計を立てている人もおり、伝統的な生業のみで生活している人はほとんどおらず、基本的には年金も含めた現金収入が主である。S 集落は 2021 年 1 月現在、27 戸のイエがあり、人口は約 60 人である。

佐渡島は離島であることから交通状況が比較的孤立的だったため、比較的最近まで伝統的なものが維持されてきたことが先行研究によって報告されている。S 集落を含む外海府地方では、家長権・主婦権を譲渡する儀礼（カマドワタシ、シャクシワタシ）、養子慣行（オトウトナオシ、イモウトナオシ）、ムラ株等の慣行が過去に存在していた〔岩本 1986〕。これらの儀礼や慣行は、村落やイエの維持・継承と密接に関わってきた。

しかし今日の佐渡島では、これらのような伝統的なもののほとんどが簡略化されたり、廃止されたりしているのが現状である。本発表では、先行研究や聞き取り調査によって明らかにした、S 集落の過去の状況と現状を比較することで、S 集落に現在起きている社会変動について分析していく。

参考文献：岩本通弥 1986「家族と親族」相川町史編纂委員会編『佐渡 相川の歴史 資料集八「相川の民俗 I」』新潟県佐渡郡相川町 pp. 171-286.

吉野英岐 2009「集落の再生をめぐる論点と課題」日本村落研究学会監修・秋津元輝編『年報村落社会研究 45 集落再生—農山村・離島の実情と対策』農山漁村文化協会 pp. 11-44.